

Seeking for Sexual Identity : Homosexuality and Homoerotic Desire in Henry James's Novels

斎藤, 彩世

<https://doi.org/10.15017/1654597>

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : 全文ファイル公表済

論文内容の要旨

Seeking for Sexual Identity:

Homosexuality and Homoerotic Desire in Henry James's Novels

(セクシュアル・アイデンティティを求めて—ヘンリー・ジェイムズ作品における同性愛) 斎藤 彩世

Henry James の作品はこれまで3期に区分されるのが常であった。初期はアメリカとヨーロッパの文化の違いを主題とし、中期は主に一つの国の中で生じる社会問題に主眼を置いた小説を書き、後期に再び国際テーマに着手するという理解が今日では通説となっている。この区分は、なぜ中期に突然異なる主題を扱い始めたのかを十分に説明できておらず、James の創作姿勢に一貫性が欠けているかのような印象を与えている。しかし、同性愛の観点で作品を見ると、作品は一貫性のある展開をしていることがわかる。James は若い頃から同性愛に関心を持ち、それが創作の動機となっていた可能性が極めて高い。彼は執筆を重ねていく中で、自らの性的アイデンティティを問う意味でも、作家として社会を捉える意味でも、同性愛に対する問題意識を深めていく。本論では同性愛の観点から James 作品を読み直し、James が作家として同性愛に対してどのような問題意識を持ち、それをどのように発展させていったのかを考察する。

James 作品を同性愛の観点で読む手法は、1990年代以降取り入れられるようになった。本論はそうした先行研究の恩恵を受けるものであるが、同性愛を主題とする James 作品の研究書は本・論文いずれの形で出版されたものも、まだ数が少ないという現状がある。過去の研究においては、小説の文体や構造そのものを同性愛者の精神構造になぞらえて分析する方法が主流である。したがって、同性愛者の心理を19世紀末から20世紀にかけての社会の中で読み解くことはあまり重視されていない。このため、登場人物の心理を中心とする作品の主題をつかみ損ねているように思われる。また、当時の文脈から読みなおす試みがなされている場合でも、扱う作品が限られており、James 作品全体の中で同性愛という主題がどのように発展していったのかが明らかにされていない。一部の作品に同性愛が見られる、という分析ではなく、曖昧に描かれているものも含め全時期における同性愛の変遷を追う必要があるように思われる。また、過去の研究においては、複数の登場人物間に見られる同性愛的欲望の存在を次々と指摘するのみで、それらが作品の主題とどのように関わっているのかが明らかにされていないものが多い。本論では、これらの問題点を克服するため、従来扱われていない作品も含め、James の創作のすべての時期に渡る作品を対象とし、同性愛のテーマがどのように発展していったのかを考察する。その際、同性愛が各作品の主題として、作品内部の他の関係性や思想とどのように連動しているのかを明らかにすることを目的としている。

前期作品からは“*The Romance of Certain Old Clothes*”、*Washington Square*、*The Portrait of a Lady*を取り上げ、James が兄 William に対する憧憬から同性愛的欲望に関心を持ち、異性愛関係に見られる同性愛を主題として小説を書き始めたことを指摘する。次に *The Bostonians*、*The Princess Casamassima* を対象に、同性間で理想的であるとされていた関係や異性(両親)間での争いなどの障害によって、同性愛のアイデンティティが挫かれたり、植え付けられたりするさまが描かれていることを考察する。この時期は従来「中期」とされていたが、この期間を「第二期」とし、次の「円熟期」との間に書かれたものを「第三期」とする。これは、第三期の作品を「円熟期」への習作ではなく、それ自体に価値のある作品群として取り扱うことを提案するためである。第三期では *The Spoils of Poynton*、*The Other House*、*The Turn of the Screw* を考察することによって、オスカー・ワイルド裁判を含む社会の変動が同性愛者の意識にどのような影響を与えていたのかを明らかにする。第三期の作品では登場人物の性的アイデンティティに大きな変化があり、自覚のない同性愛者の悲劇から、自覚のある同性愛者の苦境へと James の関心が移行している。また、上記三作品にはこれまでにないほど濃い同性同士の身体的接触や情熱的な愛が描かれるようになる。これは、James 自身の交遊関係の影響であると思われ、作者自身が自らの性的アイデンティティへの関心を強く持ち始めていることがうかがえる。最後に第四期から *The Ambassadors*、*The Wings of the Dove* を考察し、James が女性を愛することも、男性と積極的に恋愛関係を構築することもできない自分のセクシュアリティを登場人物とともに受け入れていくさまを明らかにする。*The Ambassadors* では主人公が愛する若者の不実さを嘆く場面が挿入されているが、*The Wings of the Dove* では恋人を崇高な英雄として描くことで、距離を置いて対象を愛することを選択する人物が登場する。作者自身は初恋の女性に積極的にアプローチできず、トラウマとなった経験がある。また、相手の結婚への意欲に気づきながらも愛せなかった女性に対する自責の念があった。これらの劣等感を引き起こすセクシュアル・アイデンティティが *The Wings of the Dove* では肯定的に描かれている。一方、同性の対象に恋愛感情を持ちながら積極的に関係を築けなかったことも、芸術者としての理想的な姿として描かれている。

James は生涯、同性愛への関心を創作の動機として持ち続け、社会的な事象から個人的な関心へとその主題を発展させている。特に *The Turn of the Screw* などの書かれた第三期は転換点として重要な意味を持つ上、同性愛のテーマが最も深まる時期である。この時期の重要性を十分に理解するためには、創作を四期に区分する必要がある。